

わたしの兵隊手帳 (一三) 赤谷明海

へ昭和二〇年六月十九日の項につづく

○マタイ伝 (第六章、十九) へ病院に備えつけてあったか。

なんぢら己がために財宝 (タカラ) を地に積むな。ここは虫と錆とが損ひ、盗人うがちて盗むなり。：：人は二人の主に兼事ふること能はず、：：汝等神と富とに兼事ふること能はず。この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと体のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや、：：野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れども我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装 (ヨソホヒ) この花の一つにも及へし。かざりき。

○マタイ伝 (第七章、一三—一四)

狭き門より入れ、滅 (ホロビ) に至る門は大きく、その路は広く、之より入る者おほし。生命 (イノチ) にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

○マタイ伝 (第十章三五—三七)

それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分たん為なり。：：我よりも父または母を愛する者は我に相応へふさわしからず。我よりも息子または娘を愛する者は我に相応しからず。へ次の文参照

○マタイ伝（第十一章四八）

：：「わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ」斯へかくて手をのべ弟子たちを指して云ひたまふ。「視よ、これは我が母、わが兄弟なり。誰にても天にいます我が父の御意（ミココロ）を行ふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母なり」（かく云ひて彼はその母や兄弟たちを問題にしなかつた）

○聖書に現はれたるキリストの医に関する業績。宗教と医術。

○梅神父記念医院修道女之生計

経営病院建小学校管手工へ病院ヲ経営シ小学校ヲ建テ手工ヲ営ム

へこれによつて、第二分院が梅神父記念医院だつたことが判る。二階建コの字型の建物だつたようにおもひ。シスターがいた。梅神父については未知。小学校も手工の現場も見なかつた。

○六月二十三日俸給受領（五、六二ヶ月分）

十九年十二月、二十年一、二、三、四ノ五ヶ月分ハ未受領 印鑑ハ煉瓦ヲ材料トシテ自ラ作ル

○六月二十七日より練へ原、金へンへ成班に行く事となる。数日前の診断の時自ら願ひ出て許可を得たによる。

現在体重僅かに四五斤、二週間たつて漸く○、七○〇斤増えたに過ぎない様な状況ながら、今の給養と使役では、

むしろ早く練成班に行くに若くはないと考へた。使役の事は兎も角として貧弱な給養が気にかかる。食事について余り口やかましく云ふのは気がひけるが、平素と違つて現在の様な境遇では、食事は療養に関する一大要点である筈。その食事たるや、飯の量の僅少なのと菜の質相なのは正に常軌を逸してゐる。而もその乏しい量の中から、班長食のとか、員数外のとかで不当に横流れするのだから言語同断である。(六、二六)

○予定通り練成班に転じたものの、入る一日程前から振はなかつた食欲が、此方へ入つてから余計に悪くなつた。全く味がなない。三分の一の食量を食べひあくねる程である。余程胃の腑が弱つてゐるらしい。入つた日の二十七日の夜は胸がやけた。こんな事は入隊以来初めての事。それにゲップがよく出る。腹がはれる。早く癒つてくれればいいが、斯様な状態では、毎日々々が陰気くさく、又何と云つても食ふべきものを食はないために疲労、倦怠の感が強く、作業に就いて元氣な者に負けないだけ勤めるのは困難である。(六、三〇)

○仮令、物質的な小さな恩義にしろ、一兵卒よりそれを受けた一下士官が、その兵卒を些少へ細々な理由でピンタをとると云つた場合、この下士官の行為を、情実に拘はれぬ美德とすべきや。或は兵は当然かくあるべきものとしてへ下の者がサーピスするのは当然として、それより受けた恩恵を恩恵とも考へぬ思ひ上りとすべきや、可考へかんがふべし。(七、一)

○沖繩既に玉砕し果てたとか、戦況は日々日本にとつて不利となりつつある。時として瞥見する新聞には、某高官、某名士の爆死の記事が見える。又うはさによれば、折角莫大な戦力を費消して獲得した昨年の湖南作戦の成果が近頃そろそろ崩れつつあるとか。南方へ南支へに出てゐた各部隊が内地へ転送され、従つて入院者の転属云

云等の事が屢々耳に入る。何にしてもここ半年が戦争の山である。自分の退院する日も近い。かかる時局の変動と自己の身分とが如何に交錯し、そしてその間自らを如何によく処して行くか。覚悟は如何？（七、一）  
へ二等兵の目にも半年が峠だと映っている。その後一ヶ月半で終戦。↓

○昨夜猛烈な下痢。腹部が痛む。腹の中に何も入つてゐない筈だつたのに食欲が起きない。今日の昼は絶食。身体は疲れきつてゐるが、昨日、今日雨で作業がなく大助かり。（七、一）

○現に病院にゐる者の大部分は退院することなくこのまま居残り、教育隊、練成班等は切込隊を編成する旨、班長殿より達せらる。但し統集団に属する者はまだ退院出来る見込があるらしい。（七、一）へ自分が統集団に属していたのかどうか。↓

○磐梯山節 会津磐梯山は宝の山よ笹に黄金がなり下る／東山から日日の便り行かちやなるまい顔見せに ひたし

○下痢で半食を命ぜられてからも、その半食の量さへ多すぎる程食欲がない。従つて身体の回復も遅く、遊戯一つするにも人皆の注目の的となり、たどたどしい足をひきづへずりながらの醜態は実に情ないものである。

（七、四）

○七月十八日愈々退院。漢口二陸病院第二分病棟を出て武昌の江夏へこうかへ部隊に入隊した。二分へ第二分院での想出は甚だ悪く、特に練成隊へ班での教育方針には反感をもつてゐる。江夏部隊では一週間隔離班で過すこととなり、割合に楽な生活をしてゐるが落ちつかない。身体の調子は依然悪く、下痢が癒らず、倦怠感が多い。へ江夏部隊とは武漢練成隊を指すが、建物も内務の事も何一つ覚えがない。↓

○家が恋しい。こんなところで死にたくはない。今一度！

○未だ馴れないせいもあるが、二区隊の空気も面白くない。どうも自分には運が向かないらしい。それに病後の回復が十分でなく、又何よりも精神的に活力の乏しくなつてゐることは我ながら驚く位である。すべて行動が消極的で、反撥心さへなくなつてしまつた。何くその頑張りが無い。人から苦情を言はれても腹が立たない。變つたものである。(七、二九)

○へ隔離班から区隊に復帰してすぐ衛兵についたが厳しく繁雜な事限りがない。それに班内に帰つても下番者としての厚遇がなからず。

○衛兵勤務で一昼夜巻脚絆をつけてゐると、足が膨れて痛む。脚気なのかもしれない。

○昨日の新聞に、ソ連の事を盟邦と書いてゐた。外交上の現況が想像される。

○宮城が炎上したとか。御宸へ轡へ念の程いかばかりか。(七、二七)へ入營以来はじめて天皇にふれている。江夏部隊での記事はここで終つてゐるが、別の場所に次のようなものがある。ここでの記録か。へ

○湖南進軍歌 一、一木一草いたはり進む／兵の心の豊かさよ／見ろあの雲もあの水も／まるで故郷だそつくりだ／さすが男の胸を打つ／二、破れた靴も踏みゆく土の／なぜか身に沁む温かさ／あああの丘をこの森を／赤い血潮で守らうぞ／敵は米英白面鬼／三、薄の葉末に光るは露か／やさしい湖南の御月様／民安かれと軒下に／今日もごろねの部隊長／兵が被へき／せ行く雨外套／四、赤土色した戎衣だ顔だ／友の背中にやつぎの跡／泣きつつ馬シヨク切り捨てる／兵の姿のたくましさ／歌へ湖南の進軍歌へ馬シヨクは諸葛孔

明の部符。こんを使い方は不可。ゝ

○予科練の歌へ※ 省略

○五省 一、忠節 至誠ニモトヘ原漢字ヘルナカラシムヘリシカ？ 一、礼義 敬礼ニ悔ナカリシカ 一、武勇 氣力ニ欠クナカリシカ 一、信義 言行ニ恥ルナカリシカ 一、質素 衣食ニ不満ナカリシカ

○江夏部隊衛兵守則 表門（裏門） 一、門付近ヲ警戒シ、出入者ヲ監視ス。夜間ハ特ニ部隊東側ヲ警戒ス。

二、門ノ出入ヲ許ス者（イ）准士官以上、見習士官少尉候補生及ビ其ノ隨從者（ロ）公用証、外出証明書ヲ

所持スル下士官、兵。（ハ）制服ヲ著ケ若クハ所定ノ徽章ヲ付シタル陸軍文官（ニ）憲兵、伝令（ホ）門

鑑ヲ所持スル者若クハ規定ノ腕章ヲ付スル者（ヘ）特ニ練成隊長ノ許可セル者 三、物品ノ持出ヲ許スハ准士

官以上及ソノ隨從者並ビニ所定ノ持出証ヲ所持スル者

彈藥庫 一、絶エズ彈藥庫付近ヲ動哨警戒シ異状ヲ認メタル時ハ氣ヲ付ケト呼ビ衛兵司令ニ急報スルト共ニ最寄兵舎ニ連絡ス 二、彈藥庫付近ニ人ヲ近付ケシメズ、又彈藥庫付近ニテハ裸火ノ使用ヲ嚴禁ス 三、彈藥庫ノ

開閉ヲ許スハ兵器部員トシ爾余ノ者ニ關シテハ遇番士官ノ指示ヲ受ク（兵器部員 大山中尉 松岡軍曹）

○銃前ノ任務 一、直接警戒 二、歩哨トノ連絡 三、門出入者ノ監視 四、対空監視

○不寝番守則 一、不寝番ハ火災盜難ノ予防、衛生、灯火管制ニ注意シ、一名ハ定位置ニ、他ノ一名ハ絶エズ舎内外モ動哨警戒ス。二、非常空襲、火災等異状ヲ認メタル時ハ遇番下士官或ハ隊先任者ニ急報シ要スレバ大声ニテ全員ヲ起ス。三、交代ハ上下番立会ノ上定位置ニテ行ヒ所要事項ヲ申送ル。

へ一九三七(昭和十一)年 四月十日 消印。はがき。墨書。

近日一度遊びに来たまへ、歌集へ投稿のことも迷つてゐる、学校からの帰りみちにでもい、だらう、今月の中旬  
一晩どまりで先生が旅行されるらしい 勿論お供をねがふつもり

五月二十七日 付、一十八日消印。手紙。巻紙に墨書、淡彩画一点。

水篋へ歌誌を今みて君が特選になつてゐるのでうれしく思つた 当然のことなのだが君も愉快だらう もつと  
早く特選になるべき実力を持つてゐながら何となくその力を充分發揮出来なひでゐた君が 言ひたいだけ言ひき  
つてしまつた所がうれしい あの原稿ははじめから僕がほめたのはうそではなかつたらう 分つたか

夕やみに大根の花ゆれやまず白々として風すぐるなり

は素晴らしい 小生のうたは出来がわるい

大阪

うらぶれて通天閣を仰ぐ日は空に太陽もどんよりとして

ちまた風疾く吹きすぎし土ほこりその中にわれ生命たもてり

松田へ常憲氏の歌はへ以前の連作へ月ヶ瀬ほどではないがい、。すきな人だ、ひたむきな情熱で歌つてゐる  
態度はい、と思ふ

うづらよ

うづらよ

さびしからずや

長池から

帰つて

さびしからずや

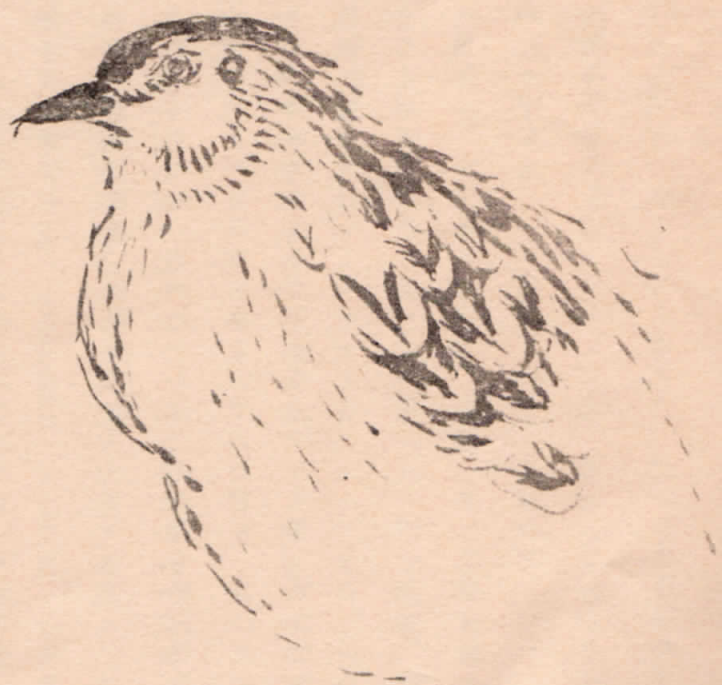
若き

沙門は

さびしからずや

さらば

ごぞんじより



へこの二十六、七、八の三日間、原田は大学の軍事教練で洛南の長池演習場に宿泊していた。



寒砵魚様

「水鏡」六月号詠草。

興聖寺

頭の上をおほひて杳き木の間よりわづかに明かき空見ゆるなり

曹洞の寺の庭には人かげなし折々さやかにさやく鐘

寺庭の岩よりたるるたり水の間遠き音はさやかに聞ゆる



嵐山大悲閣

大悲閣に登りて来れば庭竹のさやぎもさやに時雨とほれり  
木々の芽の末（うれ）よりたるる霽あり雨やみたれどなほ傘をさす

金福寺

宵々と露を保てる庭苔に陽はかそかなり暮れそめにつつ  
庫裏ぬちに人声もせぬ閑けさよ寺は夕への鐘をならさず  
なきとよむ鳥もをらねば寺庭の櫓のうれをただに吹く風

芭蕉庵

へうへうと椎の木立に音たてて風は通へど庵のひそけさ  
この庵の草屋根の上に陽はてりておのづからなる日の暮の寂へさびび？  
うき我を寂しがらせよ閑古鳥——はせを

うき人のさびて聞きけん閑古鳥鳴くべき頃となりけるかも  
露をふみて道を急ぎぬ見さくれば星のとほしき夜空なりけり

同、七月号詠草。

葉桜の色もやうやく目にたちて朝はすがしき露ふふむなり  
山木々の若葉の頃に生（あ）れいでて昼の山原に春蟬なくも

夜空

赤き星一つ目にたつしつけさよ月西空に落ちて夜の更け  
北空へ雲の流れのひそけさよ月のみぬ夜に星もとほしき  
北山も雲にかくるる夜の更けの空の気配は雨なるらしき

驟雨

えにしだの黄色き色の花房は大きくゆれて雲たれこめぬ  
吹き過ぐる風の湿りを思ふとき四方にわびしく蕪のなくなり  
空低く雲の流れのはやくしてつめたく雨の冷え迫り来ぬ

海

おぎろなき海の潮の高鳴りのただ中にして岩に立つかも  
舟いくつ見えて暮れゆく隠江の面ゆかそけき霧たちあがる  
夕暮るる舟つくり場に舟底を焼く火はあかしいつ迄もあかし  
ひとしきり一途にもえてたちあがる炎は青くさえかへるなり

七月五日 午前消印。はがき。墨書。

君の方の休暇は何日からだ、小生は七日から山陰の方へ三四日の予定で写生にゆく、出来たら一緒に行きたいが  
休みにならないだらう、とりあへずお知らせします 久高へ唯昌先生に古本やで会つた

つめたいものちらつく夜、ひさしふりに会合。さまざまの話の中から、また歌仙がはじまったのは愉快です。

狭庭にも咲きそろひてや冬の花　のぶを

の発句めでたく、鳥を見にゆくと自慢から、

スコッチ干せば鴨の立つ朝　達明

と大和尚の脇が出て来たのも極めて自然。わたしの番になったのに、もたもたしているの、殺人思想や遺伝子構造説や必然論が噴出。感嘆茫然。一夜あけて、うっすら雪のつもった道に佇ち、ふと、

偶然にまかすとわれは石蹴って　樫齋

第三として、ご両処のお許しを得られますかどうか。一九八三年十二月二十九日　樫

また歌仙を巻くことになったものの、無事に興行が進むかどうか、自分自身のことを思うと心もとない気がしないでもありません。でもなんとかやってみようと思えます。三十日に第三が届きました。偶然にまかすと蹴った石でも、意志の力は働くものだろうが、そううまく思わぬ方向に飛んで行ってはくれぬ。そこで、

木伝ふ猿の腕のたしかさ　の  
一九八四年一月一日　の

のぶを氏の自信にみちた第四を影物と見て、月の座、

とろとろと彫師の屋根の赤き月

たし、かさから坂下の家を見付けた次第。名人を仕事場でいねむらせました。フトンでもかけてやって下されば幸いです。この句を作つて、以前お話しした寺山啄木という詩人が如き質に住した彫師を思い出し、久しぶりに秋峠道人の書齋集を開きました。歌仙の余徳でしようか。一月三日 送

菊の小袖をまた質に入れ 樫

四句からの移りゆきのせい「一赤き月」が彼の詩でさえこのがすこぶる妙。その上「彫師」というのが刺青のはり師と思えたのは、風邪でねいて頼んだ探偵小説の悪しき影響でしょう。手首の菊とねばりついて来そうですが、ここは名人の人形師が彫りあげた菊の殿上人。ただし、名人が貧乏なので殿上人も余慶をうけ、重陽の宴から下がると早速、小袖を質に入れ内職の扇子の骨でも削っている、といったところ。如何？ 一月四日 樫

とろとろとした生活で質屋通い。なかなか良い付句です。昔はこういう風な生き様の人は後らもいて、破綻しそうで持ちこたえている。今のサラ金苦の世界とは違い、強い人々の住んでいた世間です。質に入れたり請け戻したり、こんな家には必ず呑み助のオヤジがいて、明日食う米が無いというのに酒は不思議とあるものです。夜は酔い暮らし、朝にはまた元気に仕事に出かけるのでしよう。

落ち口は水あふれみつ破れ蓮 はな の

こうして池の辺を歩いていても落ち口の水の流れは爽かな音を立てているし、我家のようにボロボロになつてしまつた蓮の葉さえ、むしろ気持が良い位だ。破れ蓮では恋の句が作りにくいでしょうがよるしく。十三日 の

男嫌ひに妬みよるカフエー 達

質に通って破れ連なる酒場の美女に入れあげています。先は見えていますが、角を曲ればぼっと灯明が燃えて  
いるかもしれません。果してどうなりますか。 十七日 達

金の生毛輝く夜叉女天を馳せ 櫟

酒場の美女に入れあげる経験は残念ながらないので、むかし（戦前）金色の口髭の女に夢中になる青年を  
ソ連の小説で読んだことがあります。女は馬に乗って駆けまわったような気がします。そこところはツルゲ  
ーネフの「初恋」とごっちゃになっているかもしれません。ともあれ、そのヒロインを夜叉女に見立て、生毛を  
輝かせることで高橋さん待望の灯明になぞらえたつもりですが、とんだ修羅場になりました。 十九日 櫟

遠野の「オシラサマ」が思い浮かび「ファウスト」が思い出され、何か、この世にあらざる所へ引張り出され  
たような気がします。一層のことなら天の向う側へ突抜けてやろうと、

闇引裂いて銀の滴 の

銀のしたたりは雪ではありません。前句に「金」があるのでユーカラ風に「銀」とつけてみました。23日 の  
初ウ三句、壮大な恋の成就となりました。してみると、四句の銀の滴は天の精液でしょうか。——小生はミク  
ロコスモスに身を転じ、

小書院に積みおくままの禱伽かな 達

金銀と続くので、枯淡を心がけました。 二十七日 達

パイプルの紙で葉たばこを巻く 櫟

四の在敵、五の枯淡、ともに端倪すべからざるものがあります。枯淡とはいえ銀閣寺のように底光りし、見に行つたものの、つい落着かず、貧乏書生、外に出たとたんむしようにひもじく、ポケットの底の吸いがらをほくしたものを、安物のパイプルの薄紙ひきちぎり、巻いて、ガツガツ吸つた：：という、今の若い方々には想像もつかないだろう戦後の一風景。お里が知れると我ながら苦笑。 三十日 櫟

あつしあつし月も汗する夕涼み の

ありあわせの紙で巻いたたばこの煙はさぞや熱かろう、ということでもまったく平凡な付句になりました。やたら暑い日は門にいても暑いものですが、二、三人も寄つてワイワイやっていると暑さもふつとふつというものです。今日では滅多に見かけませんが、クーラー無き時代のなつかしい下町風景です。 二月二日 の

踏まれて白くゆれる撫子 達

七句の傍若無人ぶりがナデシコの可憐を踏みつけたわけです。一寸つき過ぎですが。 四日夜 達

緋緘の武者の姿の遠くなり 櫟

七句はじつになつかしい。わたしの少年の日には、そんな夕べの記憶が、八句のナデシコのように白くゆれて重なり、女々しい感情がはさまっているのですが、この舞台では雄々しい若武者ということにして、責めをふさぎました。ご両処のお蔭で、武者修業も順調に進みそうです。寒いことですがお褒りありませんか。 七日 櫟

織おしたてデモの雄詰 の

七、日は二朝へ行っていました。小さい池、湖山（こやま）池は凍っていて、鳥の姿は見えませんでした。九

句、十日に頂いていましたが今日やっと我が句うかび、一刻も早くと、酔っぱらいつつ認む。 十四日 の

須佐之男にいざ参らせん花団子 達

図柄の一は、八坂社石段下投石の図、二はのぶを氏の如き酔っぱらいの神前献花の図、三は福宜の観光税反対デモに湯茶接待をするを諷するポンチ絵であります。 十六日 達

早乙女らしき笠田螺とる 櫟

勇ましい句がつづいたので少しおとなしく、というだけの遣句です。 十九日 櫟

十一月の庭 原田慶

自らの季節を、ふたたびとり戻すことができると信じたかのように、~~カサ~~ノゲシは大胆に太陽に向かつて手をさしのべた。

しかし、あまり念入りはその姿を整えていたせいで——みごとに完全な円形をなして、みずみずしい葉は広げられたのだったが——花を咲かせるまでに、十月の風は彼女の細胞をいためてしまった。葉はすこしずつ紫色をおび、さらにほろほろとした大毛虫の群によって食いちぎられ、ひらべったたい葉柄ばかりが、ぶざまにはいつくばっている。

秋は、おもいがけないあやまちをおかしたようだ。



秋海棠のつみとられた莖は、赤くちぢみ、鷹揚なはなやかさで、空をあおいでいた芙蓉も枝をきりはらわれた。

わたしたちは、忘れていた冬を、どうしても思い出さなければならぬだろう。

秋がかつての秋とおなじでなかったように、すぎていった冬はふたたびもどつて来ない。だからわたしたちは、いつも新しい冬に、何かを期待している。しかし冬に向かつて命令することはできないから、どんな冬にも耐えることができないのだ。

刈りとられた菖蒲や茗荷のきりくちは、まだ青くきつぱりしていて、とりみだした地面に、すこしは整頓されたあとをとどめておこうとしているようにみえる。

ああおとしげっていた庭が、わたしたちの心の中で、冬枯の庭に描きなおされていないから、外へ出て庭にであうたびに、ちぐはぐなおもいとまどつてしまう。

いくらかの葉を、地面にくつつけているヤブタビラコは、春のおわりに種子を散らせて四か月、ふたたびやさしい花をみせてくれた。

しかし、わたしたちは彼女の旺盛な繁殖ぶりに、より大きく感嘆した。その繊細できゃしゃな姿が、彼女の苦心をわたしたちに忘れさせてしまうのだ。

いまは菊だけが庭を占領している。彼女たちはすいぶんひかえめなところを持っていて、こ

れほど庭いっばいに咲いても、はなやいだ雰囲気ではない。<sup>紅</sup>や美しい虫たちは、この季節に招待されていない。彼女はバラのようにあいまいでなく、沈丁花のようにせいたくではない、彼女の香りをもっている。

春、黄金の鈴を振っていた棕櫚は、葉をふるわせて雨の音をまね、バラハラとひとをからかう風来坊だ。古い枯葉を重ね着し、瘦せた脛をむき出して、空ばかり見あげている。<sup>作の語</sup>  
然としてとだわらぬことはどうだ。

シャガールの恋人たちをそつとつんでいたようなあお桐は、黄色くなった透明な葉を夕陽にかがやかせる。しかし彼のやりかたは、すこしデリカシーにかけるようだ。その大きな葉を、長い柄のつけねから、腕をもぎとるようにばさりと落としてよこす。そして、菊のうえ、柳の枝、きんもくせいの頭、ところかまわずひっかけつばなしにするのだ。やっと色づきはじめたくちなしが考えこんでいる。

「わたしは隅っこがきらい、いたずらな虫たちやごみはみんなすみっこに集りたがるのですもの」としょっちゅう苦情をいながら病みつつけたバラは、もう一度まっ白な花を咲かせようと最後の努力を試みたのに、はやくもみどり色のあぶら虫にとりつかれてしまった。はなやかな彼女であつてみれば、虫に傷つき、首にほうたいをして、ひいひいしている姿はことさらにいたましい。わたしたちはおまえをどこへ移してやればよいだろう、いろいろ

な手あてがおまえを救うことはできなかつたようだから。

芭蕉の大きな葉は、脈にそつてこまかくきざまれ、太い葉柄が風にゆれて、にごりのないかすかなキーンという音をひびかせる。それが冬の門を押しひらこうとする冷気のふるえであるように紅葉が地にしずむ。

このような庭の中に、じつとおさえつづけられた胸からこぼれるような白い花をさし出すのがヤツデなのだ。ふかいみどりの光の中に、宇宙の無限をささえる白い花。

ひそかに咲き出る花のなんと毅然としてへつらわないことか。背の高い枇杷は、黄褐色の帽子の中に、めだたない花をそつと用意しているところだ。

爽やかなつた栞も栗も、いまわしい秋のおもいをかみしめながら、他に何か、自分にあたえられた使命があつたのではないかと、足もとをみつめ、しみじみ葉をいちまいいちまい土に落とす。それが涙であるかのように、土はしすかにうけとめ、まわりに数きつめる。

おまえが柿の木であることの、栗の木であることのあかしに、春にはそれぞれの花を咲かせたのではなかつたか。土はくろくろとしたぬくみに彼らをつつんでやろうとする。

(一九六六年十月十七日)

次は張先。まず作品をあげよう。「醉垂鞭」、

ふたつの蝶を刺繍したスカート／東池の宴で／初めて逢った／紅おしろいは濃くなかった／淡あわと春のしずかな花／／子細に見ればどこも好く／人々はいう／柳のようなほっそりさん／きのう山々の暮れるころ／やってきた衣に雲をなびかせて

一〇三〇年四十一歳で進士、二十年後、永興軍の知事晏殊の属官、一〇六一年前後に都官郎中、三年後退官、郷里で優遊自適、一〇七八年、八十九歳で死んだ。王安石、蘇軾など知名の士の多くと交り、応酬の作が少くない。それら社交の詞には事情を説明する副題や序(ことばがき)をそえた。これは張氏が創めたことらしい。序をそえた作例。「天仙子」

そのとき嘉禾(今の浙江省嘉興市)の属官だった。病気でねていたので府の宴会には欠席した。

水調のうた幾つ酒ふくみ聴く／昼の酔ひ醒むれども愁ひは醒めず／春を送れば春ゆきていつかかへらむ／夕鏡／うつろふかけ／すぎし日のかねごともおもへばむなし／／沙のへに禽そひて池暮れぬ／雲破れ月来たり花は影にぞたはむる／いくへにもとばりたれ灯をまもれども／風をさまらず／ひとしづまりぬ／あすは小径にくれなみの散り敷きてみむ

いずれも代表作といわれるもの。ことに「雲破れ」の句は評判になり張氏も得意だった。だが、これに李白の

「月下独酌」の「我歌月徘徊、我舞影凌乱」を、「あすは」に孟浩然の「春暎」の「夜来風雨声、花落知多少」をつきあてるとき、張氏の言語水準のかなり低いことが見とられよう。その詞は当時の士大夫の日常生活に近いところを発想の根拠とし、そこに新しい領域をきりひらき、清新な境地を樹立したもので、詞史上の功績に違いはないが、前回にのべた李清照の理想からすれば「名家とするには足りぬ」と評されてもしかたがないのではないか。

晏元献（殊）、歐陽永叔（脩）、蘇子瞻（軾）はその学問が神か人かというほどの方、詞を作るのは、まさに瓢の水を大海でくむようなもの。でもみな句読のふぞろいな詩だ。それにときどき音律に協和しないところがあるのはどうしたことか。だいたい、詩文は平仄の区別さえちゃんとしていけばいいのだが、詞は歌うことばだから、五音、五声、六律の区別がはつきりしてはならず、また発音の清・濁・輕・重の区別もたいせつだ。ちかごろのいわゆる「声々慢」「雨中花」「喜遷鶯」は平声で押韻したのにまた入声で押韻する。「玉楼春」はもと平声で押韻したが、また上・去声で押韻し、また入声でも押韻する。もともと仄声で押韻すべき詞は、上声で押韻すれば協和するけれども、入声でふんだのでは歌うことができないのだ。

右に引いた「詞論」の後半は高級な技術論である。詞に関する技術論はどうやらこれが最初らしい。すでに宋代の詞のうたい方が分らなくなり、專家がその復元に努力して、かなり分ってきたとはいうものの、確実完全とはいえず、「詞論」のテキストそのものにも異同があり誤りも含まれているらしい。ここでは立ちいることは避けておきたい。ただ、この技術論に照らしての三家に対する批評的をそれていないらしいことは、彼女について技術論を展開した人たちの批評から察しうる、とはいってもよいだろう。

一曲の新詞 酒一杯／去年とおなじ天気 もとのままの亭台／夕陽が西におち何時かえる／／どうしようもなく花は散りゆき／昔なじみのように燕が帰ってくる／小園のこみちを独りさまよえば

晏氏の代表作といわれる「浣溪沙」。十四歳で天子に知られ、五十そこそこで宰相となり清儉剛簡、詩文に長じたこの人は詞においても南唐の遺風をついですばらしい小令（短い詞）を生んだ。前記の詞の後段はことに有名だが、その三句をそっくりちりばめた七言律詩が彼の集中にある。どちらが先にできたのかしらないが、本人の意識においては詞は余技だから、律詩の方を重んじたのだろう。しかしこの人は、「どうしようもなく」の詞の作者として記憶され、その詩文はほとんど誰も顧みない。今のわれわれは結果から、彼の文学観のあいまいさ、詩と詞のジャンルの違いについての意識の低さを知るのだが、李清照は「詞論」で的確に指摘している。先見の明とってよからうではないか。

歐陽氏もまた官僚としては宰相となり、学者としては『新唐書』の編者の一人、『五代史記』の著者、金石学の創始者として『集古録』があり、文人としてはいわゆる唐宋八大家のひとり。門下から蘇東坡などの大家名家が輩出した。代表作の一つが「蝶恋花」

庭ふかぶか深さいくばく／柳には籠なづさひ／とばりはたへにたれこめぬ／馬よそはせて遊びにと君ゆきしへは／たかどのに上れど見えぬ章台のみち／雨ほとばしり風狂ひ弥生は暮れぬ／門とさすたそがれを／春を留めむすべそなき／涙ぐみ花に問へども花言はず／紅みだれふらここを飛びて過ぎゆく

「温純雅正」という批評にびつたりの作。李清照は「歐陽公の作った蝶恋花に、ふかぶか深さいくばく、の語

があり、わたしは、そのことばを使って、庭ふかぶかの詞を数首作った。その調はもとの陸江仙だ」といい、現に「庭ふかぶか」ではじまる「陸江仙」が二首ある。一首はさだかでないが、一首は確かに彼女のものとすることに歌いはやされる。

歐陽氏にとっては余技にすぎなかったが、しかも作品は二百三十首、当時の詞の作者としては多作で、有名なものも少くない。たとえば「生査子」

去年の上元の夜／にぎわり街の灯は昼のよう／月は柳のこずえに上り／ひとは暮れてからと約束した／今年の上元の夜／月と灯はもとのままだが／去年のひとは見あたらず／春の袖に涙いっぱい

「玉楼春」

別れてからは知らない君が遠いのか近いのか／目に触れるすべてがわびしくとてもつらい／行くほどに遠くなるほどに便りはなくなり／水はひろく魚沈み問いようもない／夜ふけて竹うつ風の秋のひびき／万の葉の千の声みな悲みだ／せめて独り寝の夢に尋ねてゆきたいが／夢もむすばず灯ももえつきて：

ただ「生査子」は五言の、「玉楼春」は七言の絶句二首を一組にしたような形で、このような調のものが歐陽氏の作には多く中には詞とも絶句ともつかぬ風なものもあるから、李清照はそこに不満だったのであろう。「神か人か」というのは破天荒のほめことば、それを呈上した上では不満はすべて言ってよい。まっ正直な彼女はそう思ったに違いない。それさえひかえるのはへつらいだ。おれはへつらいが好きだ、と『茶の本』の著者がいったとか。おのれの剛直を誇る人でもやはりまどかに甘いことばの方を愛するのかもしれない。蘇軾については次回でのべることにしよう。

(一九八四年五月十五日)

ブーさんは、朝五時ごろにおきて、おうちの前をおそうじします。ほろきで、さっさ、さっさときれいにします。それがおわると、11時ごろまで、ぐう、ぐう、ぐう。そして目がさめると、おふとんをきちんともものほしざおにかけて、木のぼりで、ばたばたたいて、よくかわかします。それから、はちみつをひとつほなめて、きれいに洗ってまたほします。つぼをほす間、ふとんをとりこんで、また、お昼ねです。おきたら、はちさんのところへ、みつとお花を交かんしに、つぼと花たばをかかえて行きます。みつをつぼにいっぱいもらうと、おうちへ帰ります。ばたんとドアをしめて、みつを戸だなにしまうと、おともだちのコブタさんや、ウサギさんに、お手紙を書きます。書きおわると4時ごろです。

お台所へ行って、おなべに、くりとくるみとらっかせいのみを入れて、クリームとバターとミルクも入れて、ぐつぐつにて、スプーンでたべます。食べおわると、食器をかたづけけます。ウサギしんぶん社のウサギしんぶんを読みます。

それがすむと、ゆつくりとコーヒーをわかし、本をよみながらのみます。そして、部屋のすみの、はちうえに、水をあげます。

8時。そして、部屋の整理をしてねます。

さて、これがブーさんの一日です。ブーさんは、ずいぶんねほすけさんですね。

(一九八三・六・一九)